

1	会議名	交流・文化施設等整備検討委員会
2	日時	平成21年8月11日(火) 午後3時から5時15分まで
3	会場	上田駅前ビルパレオ 2階会議室
4	出席者	日端委員長、龍野副委員長、美山委員、伊藤委員、成沢委員、山浦委員、山崎委員、小池委員、森委員、寺島委員、西澤委員、浦委員、竹花委員、小川委員、柄沢委員、田中委員、清住委員、桜井委員、竹内委員、宮下委員、宮本委員、関田専門委員、 【欠席委員】土本委員、関口委員、岡村委員、山岸委員、
5	市側出席者	大澤政策企画局長、小市教育次長、宮川政策企画課長、中部文化振興課長、中山公園緑地課長、清水都市計画課長、伊藤交流・文化施設建設準備室長、近藤政策企画担当係長、室賀交流・文化施設準備係長、徳田主査、
6	公開・非公開等の別	公開・一部公開・非公開
7	傍聴者1人	記者6人
8	会議概要作成年月日	平成21年8月12日
協 議 事 項 等		
1	開会	(大澤政策企画局長)
2	委員長あいさつ	(日端委員長) 委員長：前回行われた先進文化施設視察について事務局から内容を報告する。その後、今日の本題である最終報告の素案について様々な意見をいただきたい。
3	議事	(1) 全体整備事業費の上限見直しについて 事務局：7/29市議会全員協議会での報告内容を説明したい。資料1は当日の配布資料。(資料1説明) 委員：この内容は、本来であれば検討委員会で議論を行い、了解の上で議会に説明すべきではなかったか。135億円への減額に反対するわけではないが、財源の内訳も不明であり、そもそも道筋がおかしいのではないかと。事前配布資料の議会特別委員会からの意見について、資料の日付は5/8だが検討委員に配布されたのは8/7。遅れて配布された意図はどのようなものか。 事務局：整備事業費の見直しについて、前回までの大ホールの議論を踏まえ、また1500と1700席の建設費の差が約3億円という見込みから、小ホールや美術館等も含め最大規模での想定事業費を135億円と算定した。7/29は雇用や経済対策の補正予算を提案する臨時議会であったが、その機会に全員協議会を設定し説明を行った。事後報告ではあるが理解いただきたい。次に財源について、全体事業費135億円の場合、まちづくり交付金14億円、合併特例債111億円、一般財源10億円を見込んでいる。最後に、特別委員会では交流・文化施設について主体的な調査検討等が行われており、中間報告に対しても資料のような多様な意見が出されている。配布に関してはタイミング等々の問題もあったが、正副委員長の了解のもとで今回配布することとした。 委員：「議会に先に報告したため、後はこの内容に従ってください」と、極端に言えばこのように聞こえてしまう。今後は検討委員会を無視し、先に議会報告するという事は無い様にしてほしい。 委員：特別委員会からの意見が5/8であり、つまり市民公聴会などの前に出されたということか。 事務局：中間報告の内容を事務局で説明し、それを踏まえて特別委員会の議員から意見が出された。なお、市民公聴会は5/13に開始した。 委員：以前にも特別委員会から意見が出されている。私が所属する会ではその内容を検討し委員会宛てに意見も出したが返事は来っていない。なぜ意見が出されるのか、また意見の根拠も分からない。 事務局：交流・文化施設の整備にあたっては、検討委員会で議論されているが、議会でも特別委員会を設置し調査研究が行われ、中間報告に対しても意見があるということ。市としては広く市民の皆様から意見をいただいております。議会の意見も参考に今後の検討につなげられたい。 委員：特別委員会の意見の中に「美術展示は笠原工業の繭倉を活用」とあるが趣旨がわからない。アトリエについても「既存施設の活用」とあるが、具体的にどこを指しているのか、意見を出す以上は、根拠を示さなければ、ただ面積を縮小すれば良いという風に聞こえてしまう。 事務局：整備事業費の見直しや特別委員会からの意見について、提案するタイミングは事務局としても

悩んだのは事実。検討委員会も議会の特別委員会も非常に大切な存在であり、どちらを優先するかではなく、議会からも自由な意見として検討委員会でしっかりと議論されたいという事。

委員：私達は市民の代表として出席しているが、特別委員とはどういう人達で、そしてその後ろにどれだけの年数をかけて、ホールや美術館などを考えてきた方たちがいるのか。

事務局：市の予算執行にあたっては議会の存在があり、その上で市の重要課題としての交流・文化施設のありかたを検討している。特別委員会は市議会の議員で構成され、確かにこれまで何年も回を重ねて議論してきたわけではないが、議会の立場において検討しているということ。

委員：整備事業費が減額したにも関わらず、一般財源が今までと同様に10億円というのはなぜか。

委員長：市の負担額と国の負担額がそれぞれいくら減ったのか、それも併せて説明されたい。

事務局：市民公聴会や出前講座などでは、合併特例債は様々な事業に活用してほしいという意見が非常に多い。これにより様々な地域課題に対応できる可能性も理解されたい。

委員：整備事業費150億円で市の最終的な負担は48億円であったが、これはどのように変わるか。

事務局：整備事業費135億円の場合、合併特例債111億円のうち交付税措置が70%つまり78億円となり、その残金33億円と一般財源10億円を合計した43億円が市の最終的な負担となる見込み。

委員：150億円を135億円にした場合、市の負担48億円が43億円となる。であればこの減額の5億円でもっと良いものを作るという考えもあると思う。市の負担がもっと減るものと思っていた。

委員長：市の負担が5億、国の負担が10億減るということ。予算の話は市当局が権限を持っているため、私達は意見はいう事はできても、予算をいくりにしてくれという事は言いにくい。

委員：ただ、せっかく作るのであれば総体の枠の中でいかにはめ込もうかという・・・、

委員長：そのとおりだと思う。最初は150億の中でどれだけ良いものを作るかということであったが、こうした経済状況下で135億という数字が出てきた。これを私たちが議論してやはり150億に戻すというわけにはいかないと思う。つまり135億の中で良い施設を作るという事が私達の課題ではないか。重要な問題ではあるが、こういうことでよろしいか。

委員：(賛成)

## (2) 第14回検討委員会(先進施設視察)の報告について

事務局：(資料2説明)

委員：成城ホールのような箱型のホールは、一般的にフラッターエコー(向き合った壁面に音が往復反射し多重に聴こえる現象)が発生しやすく、対応策として内部を吸音にする必要がある。成城ホールでも壁面や天井を穴あきにするなどの措置が採られており、さらにロールバック席自体も、電動時に音が響かないように、床部分をカーペットにして吸音している。しかし吸音は音響的には逆効果で、音がうまく乱反射し、どこの席でも均一の音になるという状況を実現しにくい。つまり「音が良い」事と「吸音する」事をいかに調和するかということが、非常に難しい課題。

委員長：解決方法というのはあるのだろうか。

委員：やはり成城ホールでも採られている対策だが、壁面に凹凸をつけることによりフラッターエコーをある程度軽減することができる。ただし、全面的な解決はあきらめるべき。

委員長：最大の原因は箱型の形状ということか。

委員：箱型でもシューボックス(靴箱)型のホールは、音を乱反射させるため座席の位置を斜めにして傾斜をつけている。しかしロールバックは一行で出てくるためこうした工夫ができない。

委員長：例えば、卵型にしてはどうか。

委員：卵形にしたことで音響上非常に苦労しているホールが実際にある。

委員：ヨーロッパでは教会などでもコンサートが行われ、残響が多い中で独特の響きが生まれていると思うが、そういうものを狙ってはどうか。

委員：教会の場合は音が自分の体を包むように響き、宗教的な恍惚感を与えてくれる。しかしこういう文化施設では、演奏者から聴衆に向かう音と、聴衆を包む音とのブレンドが重要だと思う。

委員：大ホールについても言えることだが、例えばクラシックもポップスもという多目的を想定するのであれば、どうしても一定の犠牲は生じてしまう。その点を理解したうえで、最新の設計、建築を行い、それをうまく使いこなしていくという事ではないか。

委員：そのとおりだと思う。全ての演目に100点の多目的ホールは不可能であり、委員や市民の皆さんが何に重点を置くのか、ぜひ考えた方が良く思う。

委員長：特に他になければ議事の(3)に移りたいがよろしいか。

委員：(賛成)

(3) 検討結果報告書（最終報告書）素案の検討について

事務局：(資料3説明)

委員：小ホールはロールバックは多目的に使えるが良いが、古くなった時のメンテナンス費用が大きいと思う。また音楽での使用が多いと思われるため、音響面においても固定式が良いのではないかと。

委員長：成城ホールでは最新のロールバック座席を確認したが、確かに、例えば10年経ったときにその機械がどのようになっているのかという懸念はある。

委員：音楽や演劇、また映画のまち上田としての映画上映を想定した固定席、あるいは美術展示を想定した平土間式という、この2つの方法があると思う。最終報告にはこの方向性について併記するのか、それとも検討委員会の中で一案に絞るのか、この点も課題ではないか。

委員：箱型の形状が非常に気になる。素案には「質の高い芸術鑑賞にも対応」とあるが、完成してみるとそうではなかった、では困る。前回の視察では、同じホールの中でも、ロールバックが出ている状態とそうでない状態との音響の比較、あるいは他の施設との比較ができず残念に思う。

委員：何度かホールの計画に関り毎回経験する事は、検討報告書や基本計画の具体的な実現方法が十分に議論されず、結果として多目的にしておけば安全という考え方になる事。これは様々な設備の飽和状態、また無駄な設備投資にもつながる。それから「人にやさしい」など上田ならではの精神や特色を大事にすべきで、例えば蚕業において、依田社の下村亀三郎のように、事業的に成功し地域にも優しいという、こうした上田市の品格や先端性を還元した施設であるべきだと思う。また文化施設は人材の部分非常に重要で、観客、運営者、NPOやボランティア、また障がいのある人を支える人、それら幾重もの人の輪を作ることが極めて重要。それと文化施設は教育機関でもあり、中間報告では例えばミュージアムショップは教育機能という表現があったが、今回は削除されている。小ホールの議論も重要だが、10年後に何が作られ実現しているのか、その部分を議論することも必要。

委員長：教育機能の表現が抜けたのは単純な誤操作だと思う。それから人材などの話は、ホールに関しては触れられているが、その他に関しては記載がないので・・・。

委員：小ホールについて、丸子文化会館の小ホールは平土間だが非常に使い勝手が良く、稼働率も高い。子どもたちの送迎会やパーティにも使われており、こうした平土間も良いのではないかと。

委員：この小ホールはダンスホールにも使われている。

委員長：丸子文化会館の小ホールは平土間で、音響性能も高いということか。

委員：音響も良く、コーラスなどでも普通に使われている。

委員長：音響性能を持った平土間式が可能なのか、あるいはやはり難しいのか・・・。

委員：各委員が個々のイメージで発言するのではなく、少し具体的な議論が必要ではないか。

委員長：それは今日やりましょう。

委員：小ホールの利用度が最も高く、平土間にする一番大きなポイントは美術の展示やパーティであり、しかし地域文化の振興という意味では、300～350席程度で音楽や演劇に適した固定席を期待する。大ホールについても、市民理解や稼働率を高めるためには、1600程度が適当ではないか。それから整備事業費の135億円は、小ホールは可動席と固定席のどちらを想定しているか。

事務局：これまでのモデル例（第13回会議資料参照）を確認したい。座席数約250席での建設費は、平土間式が約6億、平土間+可動席が約8億、固定席で舞台をプロセニウム形式とした場合、約10億で試算している。なお135億円は固定席、つまり最大値での想定となっている。

委員：報告書には、もう少し踏み込んだ表現がほしい。美術館に関して、山本県が自由画教育運動を始めたのは日本の教育史上非常に画期的な事で、その点で上田は日本の近代美術教育の聖地であると思う。これを第1次芸術文化革命とすれば、今回の文化施設整備は第2次芸術文化革命であるという、それくらいの姿勢がほしい。山本県も石井鶴三も芸術をとおして人間性を解放しようとしたが、現在は非行の低年齢化や不登校の増加など、これらに対して市はどのような姿勢で臨み、この施設でも、単に音楽や美術という事ではなく、現況を踏まえた方向性を示すべきではないか。

委員長：最終報告書のどの部分に、どのように表現するのか、具体的な案を事務局に出してほしい。

委員：小ホールを固定席にした場合、美術館の面積2500㎡では県展等の大規模展示は不可能。府中市美術館は7800㎡だが、子どもの創作や発表の場を含めると決して広くはない。牛島憲之記念館もあったが、上田の石井鶴三の作品群はもっと多い。それらを踏まえると、2500㎡でいかにも「美術館を作った」と言われると非常に疑問。固定席にした場合に、交流施設で展示に使用できる空間をどの程度確保できるのか。できなければ、音響の問題もあるが多目的な可動席とせざるを得ないと思う。次にP.10の運営のマネジメント能力の部分で「舞台芸術に関する高度な専門

- 性を備えた人材」とあるが、美術館は学芸員が大変重要で、美術館に関しても明記してほしい。
- 委員：当初、ベストな選択は、1800席程度の大ホール、500席程度の中ホール、そして平土間の小ホールを揃えることとと思っていたが、予算や稼働率を考えれば、1700席の大ホールと、その客席を仕切ることのできる中ホール、平土間で多目的な小ホール、これが今の時代に合っていると思う。例えばウィーン少年合唱団は演奏後に地元の人と交流会を行うが、その際に多目的な小ホールが活きてくる。美術展示もそうだが、最近はダンスやコンサート、演劇も平土間でを行う例が増えている。ただどうしても音響の問題は生じるので、その点は設計上で配慮するという事ではないか。
- 委員：あえて逆の立場から言うと、それを実現するためには、市は多額の自主事業費を計上する必要がある。ここで重要な事は、文化の受益者の偏在性という視点。つまり市民全体からすると文化芸術を好む人の割合は決して多くはないが、例えば自主事業の予算を年間3億円とした場合、文化芸術を好む、好まないに関らず1人当たり約2000円の負担となる。この点は市民の痛みとしてしっかりと受け止め、しかし同時に、関心のない皆さんにも利益が還元される行動であることも説明しておく必要がある。文化の事業費が1とすると、その地域に対しての経済波及効果は1.49であり、全ての市民に対してと言うわけではないが、これだけの効果が地域にある。
- 委員：市の自主事業で行えば多額の予算が必要になるが、プロモーターや報道機関の事業部が主催する場合は異なる。全て市の主催で行うべきだとは言っていない。
- 委員：現実的には、大きな公演は市が補助しなければ成り立たない。
- 委員：自主事業の場合はそうだが、民間がやる場合は貸館となる。
- 委員：貸館の場合は民間の主催者がリスクを負担するが、自主事業の場合は市民負担も十分考えなければならない。そして市民理解を得るためには、経済波及効果、例えばケータリングの人であるとか、交通関係の人であるとか、そういう説明がなければ公共の文化施設としては苦しいと・・・。
- 委員：今の議論について、小ホールに絞って考えると、やはり多目的ということが必要ではないか。
- 委員：平土間が不適という事ではなく、完全な多目的ホールは不可能ということを理解してほしい。
- 委員：市民参加型の活動ができる、特に若い人がダンスなどで使えるような平土間を望む。また、華道では水を使うためフローリングが良いという意見があり、その点でも平土間が良いと思う。
- 委員長：時間も過ぎていたのでまとめたい。まず美術館や交流施設などについて、運営のノウハウや人的な貢献をもう少し強く表現すること。次に小ホールについて、1案としては、多目的を狙って結局何も得られないという意見もあるが、平土間式は様々な形で高い利用が期待できるということ。2案目は、音楽を中心に考えた固定席にして、多目的利用は交流施設で補うということ。この施設の最大の特徴は、ホール・美術館・交流施設を持った複合施設だということであり、シェアの方法によっては、単に物理的な空間を足し合わせる以上の運営ができるはず。交流施設には多目的ルームという部屋があるため、多目的利用の受け皿として十分かどうか事務局で精査し、次回この2案から決着したい。今日決定する方法もないわけではないが、次回までに10日間あるため、その間で今日の議論を各委員の中で整理いただき、次回決定するという事でどうか。
- 委員：次回は、小ホールを箱型にした時に、壁の形状などで音響をどの程度調整できるのか、その点を示してほしい。何もできないのであれば賛成できない。
- 委員長：なかなか難しいという意見があったが、成城ホールでも様々な工夫がされている。
- 委員：可動席でどのレベルまで音響的に対応できるか、次回は専門委員会との合同会議であるため、詳しい専門委員に意見を聴取してはどうか。
- 委員長：できるだけやるということでしょう。今日はこれで終わりにしたいよろしいか。
- 委員：(賛成)

### (3) その他

事務局：次回は8/21午後3時から上田商工会議所4階会議室で開催し、小ホールについては新たに資料を提示する。今日発言できなかった意見があれば、FAXなどで8/18までに提出されたい。それから一点付け加えたいが、先日の成城ホールの視察は、ロールバック式の座席を中心に研究するという目的で計画した。目黒パーシモンホールや杉並公会堂の小ホールは可動席でありながら素晴らしい音響効果を実現しており、またパーシモンホールは美術展示にも使用されている。この点も踏まえ、次回は専門委員会との合同開催という中で改めて検討されたい。